ディオグネトスへの手紙

著者不明
藤遥　制作

1〜4章　はじめに、偶像の神々、ユダヤ人の礼拝

1:1 ディオグネトス閣下、あなたは、キリスト者が神を敬うことについて学ぼうと、ことのほか熱心でおられます。そして、彼らについて、実にはっきりと、念入りに尋ねておられます。彼らはどんな神に信頼し、どのようにその神を礼拝して、皆そろって世を見下し、死を軽んじているのか。どのようにして、ギリシャ人が神々とみなすものを神と認めず、ユダヤ人の迷信も守らずにいるのか。互いにどんな情愛を抱いているのか。また、この新しい民、あるいは生き方は、いったいなぜ、以前ではなく今になって、人の世に入ってきたのか。そういうあなたを見て、わたしは、あなたのこの熱意を心から喜びます。そして、わたしたちに語ることも聞くことも備えてくださる神に、求めます。わたしには、あなたが聞いてできるかぎり良い者となるように、語ることが与えられますように。あなたには、語った者が悲しまずにすむように、聞くことが与えられますように。

2:1 さあ、あなたの心を前から占めている、すべての考えから自分をきよめ、あなたを欺く習わしを捨て去ってください。あなた自身も認められたとおり、新しい言葉を聞こうとしておられるのですから。そうして、初めからやり直すように新しい人となって、目だけでなく、思慮をもって見てください。あなたがたが神々と呼び、神々とみなしているものが、何でできていて、どんな形をしているのかを。2:2 あるものは石で、足で踏まれる石と変わりません。あるものは青銅で、わたしたちが使うために鍛えて作った器より、少しも優れていません。あるものは木で、もう腐ってさえいます。あるものは銀で、盗まれないように見張る人を必要とします。あるものは鉄で、さびにむしばまれています。あるものは焼き物で、いちばん卑しい用のために作った器より、少しも見栄えがよくありません。そうではありませんか。2:3 これらはみな、朽ちる材料でできているではありませんか。鉄と火で鍛えて作ったものではありませんか。あるものは石工が、あるものは銀細工人が、あるものは陶工が形づくったのではありませんか。職人の技でこうした姿に打ち出される前は、どれも、職人それぞれの手で、別の姿に変えられうるものだったのではありませんか。それは今もなお同じではありませんか。今、同じ材料でできている器も、同じ職人の手にかかれば、こうしたものと同じになるのではありませんか。2:4 また逆に、今あなたがたが拝んでいるこれらのものも、人の手で、ほかの器と同じ器になりうるのではありませんか。みな、もの言わぬものではありませんか。目が見えず、いのちがなく、感覚がなく、動かないではありませんか。みな腐り、みな朽ちていくではありませんか。2:5 こんなものを、あなたがたは神々と呼ぶのですか。こんなものに仕えるのですか。あなたがたは、こんなものを拝んで、すっかりこれらと同じ者になっています。2:6 あなたがたがキリスト者を憎むのは、彼らがこれらを神々とみなさないからなのですか。2:7 実際、あなたがたこそ、たたえているつもりで、そう思い込みながら、はるかにこれらを軽んじているではありませんか。あなたがたは、石や焼き物の神々は、番もつけずにあがめます。ところが、銀や金の神々は、盗まれないように、夜は閉じ込め、昼は番人をそばに置きます。それは、はるかにこれらをあざけり、侮ることではありませんか。2:8 あなたがたは、誉れをささげているつもりでいます。しかし、もし彼らが感じるなら、その誉れでかえって彼らを罰しているのです。もし感覚がないなら、あなたがたは、血と脂の煙で彼らを礼拝して、彼らを試しているのです。2:9 あなたがたのだれでも、これを耐えてみなさい。自分の身にこうされるのを、我慢してみなさい。しかし、人であれば、だれ一人、この罰を進んで我慢しはしないでしょう。人には感覚も分別もあるからです。ところが、石は我慢します。感覚がないからです。それでは、あなたがたは、石の感覚を試しているのではありませんか。2:10 それで、キリスト者がこのような神々に仕える身でないことについては、ほかにも多くのことを言えるでしょう。しかし、これだけでも十分だと思わない人がいるなら、それ以上を言っても無駄だと、わたしは思います。

3:1 次に、キリスト者がユダヤ人と同じやり方で神を敬わないわけを、あなたは何より聞きたいと望んでおられると思います。3:2 さて、ユダヤ人は、もし先に述べたこの祭儀から離れているなら、正しく考えています。万物のただ一人の神をあがめ、主と考えるのがふさわしいとしているのです。しかし、もし先に述べた者たちと同じやり方で、この礼拝を神にささげているなら、大きく誤っています。3:3 実際、ギリシャ人は、感覚のない、もの言わぬものにささげ物をして、無分別のしるしを示しています。ユダヤ人は、同じものを、必要としておられるかのように神に差し上げているつもりです。しかし、彼ら自身、それを、神を敬うことではなく、むしろ愚かさだと考えるのが当然でしょう。3:4 天と地と、その中のすべてを造られ、わたしたちみなに必要なものを備えてくださる方は、そのどれ一つも必要とされないからです。彼らがささげているつもりのものも、この方ご自身が彼らに与えておられるものなのです。3:5 血と脂の煙と燔祭によって神にいけにえをささげ、こうした誉れで神をたたえているつもりの者たちがいます。彼らは、もの言わぬものに同じ熱心を示す者たちと少しも違わないと、わたしには思われます。一方は、誉れにあずかることのできないものにささげ、もう一方は、何も必要とされない方にささげているつもりなのです。

4:1 また、食べることについての彼らの小心や、安息日についての迷信があります。割礼の自慢や、断食と新月の見せかけもあります。これらは笑うべきもので、取り上げるにも値しません。これについて、あなたがわたしから学ぶ必要があるとは思いません。4:2 実際、神が人の用のために造られたものがあります。彼らは、そのあるものを良く造られたものとして受け入れ、あるものを役に立たない余計なものとして退けます。これは道に外れたことではありませんか。4:3 また、神が安息日に良いことをするのを禁じておられるかのように言って、神について偽るのは、不敬虔なことではありませんか。4:4 また、彼らは肉を削ることを、選ばれたことのあかしとして自慢し、そのゆえに特別に神に愛されているとします。これは物笑いの種ではありませんか。4:5 また、彼らは星や月に付ききりで、月々や日々を見張って守ります。そして、神の計らいと季節の移り変わりを、自分たちの思いのままに分け、あるときは祭りに、あるときは喪に当てています。だれが、これを神を敬うしるしと考えるでしょうか。むしろ、はるかに無分別のしるしではありませんか。4:6 それで、キリスト者は、世の人々に共通のむなしさと欺き、ユダヤ人のこだわりと自慢から離れていて、それは正しいことです。そのことを、あなたはもう十分に学ばれたと思います。しかし、キリスト者自身が神を敬うことの奥義を、人から学べるとは思わないでください。

5〜8章　世にあるキリスト者、遣わされた方、ご自身を示された神

5:1 実際、キリスト者は、住む土地によっても、言葉によっても、習わしによっても、ほかの人々と区別されてはいません。5:2 彼らは、どこかに自分たちだけの町を持って住んでいるのではないからです。変わった言葉を使うのでも、人目を引く暮らしを送るのでもありません。5:3 もちろん、彼らのこの教えは、せんさく好きな人間の、何かの考えや思案によって見いだされたものではありません。また彼らは、ある人々のように、人間の説を掲げてその先頭に立っているのでもありません。5:4 彼らは、それぞれに割り当てられたとおり、ギリシャ人の町にも未開の人々の町にも住んでいます。そして、着る物や食べ物やそのほかの暮らしでは、その土地の習わしに従いながら、自分たちの市民としての生き方を示しています。そのありさまは驚くべきもので、だれもが認めるとおり、思いもよらないものです。5:5 彼らは自分の祖国に住んでいますが、寄留者として住んでいます。市民として、すべてにあずかり、異国の者として、すべてを耐え忍びます。どの異国も彼らの祖国であり、どの祖国も異国です。5:6 皆と同じように結婚し、子供をもうけます。しかし、生まれた子を捨てはしません。5:7 食卓はだれとでも共にしますが、寝床は共にしません。5:8 彼らは肉のうちにありますが、肉に従って生きてはいません。5:9 地上で日を過ごしていますが、天の市民として生きています。5:10 定められた法に従っていますが、自分たちの暮らしぶりでは、法にまさっています。5:11 すべての人を愛しているのに、すべての人から迫害されています。5:12 人に知られていないのに、罪に定められます。殺されて、生かされます。5:13 貧しいのに、多くの人を富ませます。すべてに事欠いていながら、すべてにあふれています。5:14 辱められても、その辱めの中で栄光を受けます。そしられても、義とされます。5:15 ののしられては祝福し、侮辱されては相手に誉れを与えます。5:16 善を行っているのに、悪人として罰せられます。罰せられても、生かされる者として喜びます。5:17 ユダヤ人からは他国人として戦いをしかけられ、ギリシャ人からは迫害されます。それなのに、憎む者たちは、その敵意のわけを言うことができません。

6:1 ひと言で言えば、からだにとっての魂、それが、世にあるキリスト者です。6:2 魂は、からだのすべての肢体に散らばっています。キリスト者も、世の町々に散らばっています。6:3 魂はからだの中に住んでいますが、からだから出たものではありません。キリスト者も世の中に住んでいますが、世から出た者ではありません。6:4 見えない魂は、見えるからだの中で見張られています。キリスト者も、世にいることは知られていますが、彼らが神を敬うことは、見えないままです。6:5 肉は、何も害されていないのに、魂を憎み、魂に戦いをいどみます。快楽にふけるのを妨げられるからです。世も、何も害されていないのに、キリスト者を憎みます。彼らが快楽に逆らうからです。6:6 魂は、自分を憎む肉と肢体を愛します。キリスト者も、自分を憎む者たちを愛します。6:7 魂はからだの中に閉じ込められていますが、からだを一つに保っているのは魂です。キリスト者も、牢に入れられたように世にとらわれていますが、世を一つに保っているのは彼らです。6:8 不死の魂は、死ぬべき幕屋に住んでいます。キリスト者も、朽ちるものの中に寄留しながら、天にある朽ちないことを待ち望んでいます。6:9 魂は、食べ物と飲み物を切り詰められて苦しめられると、かえって良くなります。キリスト者も、日ごとに罰せられながら、ますます増えていきます。6:10 神は、彼らをこれほど重い持ち場に置かれました。そこから退くことは、彼らに許されていません。

7:1 実際、先に言ったとおり、彼らに伝えられたこの教えは、地上で見いだされたものではありません。彼らがこれほど念入りに守るのがふさわしいとしているのも、死ぬべき人間の考えではありません。また彼らは、人間の奥義の管理をゆだねられているのでもありません。7:2 そうではなく、それは、まことに、全能で、万物を造られた、目に見えない神ご自身によるのです。神ご自身が、天か

ら、真理と、聖なる、人の思いの及ばないことばとを人々のうちに据え、彼らの心に固く植えつけられました。人が推し量るように、人々のもとに、だれか仕える者を遣わされたのではありません。御使いや支配者を遣わされたのでもありません。地上のことを治める者や、天のことの取り仕切りをゆだねられた者の、だれかを遣わされたのでもありません。遣わされたのは、万物の匠であり創造者である方ご自身です。神はこの方によって天を造られ、この方によって海を定めた境に閉じ込められました。この方の奥義を、すべての元素は忠実に守っています。太陽は、昼の運行の度合いをこの方から受けて、それを守っています。この方が夜に輝くように命じられると、月は服します。月の運行に従う星々も、この方に服します。すべてのものは、この方によって整えられ、区分され、従わされています。天と天にあるもの、地と地にあるもの、海と海にあるものです。火も、空気も、深淵も、高い所にあるもの、深い所にあるもの、その間にあるものも、そうです。神は、この方を彼らのもとに遣わされたのです。7:3では、人間のだれかが考えそうなように、力ずくで支配し、恐れさせ、おびえさせるために遣わされたのでしょうか。7:4決してそうではありません。王が、王である子を遣わすように、寛容と柔和をもって遣わされたのです。神として遣わし、人として[1]人々のもとに遣わされました。救おうとして遣わされたのです。説き伏せようとしてであって、無理強いしようとしてではありません。神には、無理強いということがないからです。7:5招こうとして遣わされたのであって、迫害しようとしてではありません。愛そうとして遣わされたのであって、裁こうとしてではありません。7:6実際、神はやがて、この方を裁く者として遣わされます。そのとき、だれがこの方の来臨に耐えられるでしょうか[2]。7:7主を否ませるために獣に投げ与えられても、屈しない人々を[3]。7:8罰せられる者が多ければ多いほど、それだけほかの者たちが増えていくのを、あなたはご覧になっているではありませんか。7:9これらは、人のわざとは見えません。これらは神の力です。これらは、この方の来臨のしるしです。

8:1実際、この方が来られる前に、人々のうちのだれが、神とはいったい何であるかを、そもそも知っていたでしょうか。8:2それとも、あなたは、あの信頼に足るという哲学者たちの、むなしく、たわごとのような言葉を受け入れておられるのでしょうか。彼らのうちのある者たちは、神は火だと言いました。自分たちがやがて行き着くもの、それを神と呼んでいるのです。ほかの者たちは水だと言い、またほかの者たちは、神によって造られた元素のうちの何か別のものだと言いました。8:3けれども、こうした言葉のどれかが受け入れられるものなら、ほかの造られたものも、一つ一つ同じように神だと言えるでしょう。8:4しかし、これらは、いかさま師たちのこけおどしであり、惑わしです。8:5人々のうちのだれも、神を見たことも、知ったこともありません。神が、ご自身を示されたのです。8:6神は、信仰によって、ご自身を示されました。信仰によってだけ、神を見ることが許されているのです。8:7実際、万物の主であり創造者である神は、すべてのものを造り、秩序に従って分けられました。この神は、人を愛するだけでなく、辛抱強くもあられたのです。8:8それどころか、この方は、いつもそのような方であられ、今もそうであられ、これからもそうであられます。慈しみ深く、善く、怒らず、真実な方です。そして、ただこの方だけが善い方です。8:9そして、大いなる、言い表しようのない思いを抱かれると、それを、ただしもべにだけ打ち明けられました。8:10それで、神は、ご自分の知恵あるご計画を奥義のうちに秘めて、守っておられました。その間は、わたしたちをなおざりにし、気にもかけておられないように見えたのです。8:11しかし、神は、愛するしもべによってそれを明らかにし、初めから備えられていたものを現されました。そのとき、すべてを一度にわたしたちに与えてくださったのです。神の恵みのわざにあずかることも、見ることも、悟ることもです。わたしたちのだれが、そんなことを期待したでしょうか。

訳注

1 『人として』の語は写本になく、後に補われたもの。
2 写本はここで途切れる。写した人は、元の写本にも欠けがあったと書き添えている。
3 前の欠けのため、文の途中から始まる。

9〜10章　時を待たれた神、神に倣う者

9:1それで、神は、すべてのことを、すでにご自分のうちで、しもべと共に計らっておられました。そのうえで、以前の時までは、わたしたちをそのままにしておかれました。わたしたちが望むままに、乱れた勢いに流され、快楽と欲望に引きずられるのを、許しておられたのです。それは、わたしたちの罪を喜んでおられたからでは決してなく、忍んでおられたからです。あの不義の時をよしとしておられたからでもなく、今の義の時を造っておられたからです。あの時には、わたしたちは自分の行いによって試され、いのちにふさわしくない者とされました。それは、今、神の慈しみによって、ふさわしい者とされるためでした。また、自分の力では神の国に入れないことを明らかにしたわたしたちが、神の力によって、入ることのできる者とされるためでした。9:2けれども、わたしたちの不義は満ち、その報いとして罰と死が待ち受けていることも、すっかり明らかになりました。そして、神が、これからはご自分の慈しみと力とを現そうと、前もって定めておられた時が来ました。ああ、神の比べようもない、人を愛する心と愛よ。そのとき、神はわたしたちを憎まず、退けず、悪を覚えて恨むこともなさいませんでした。かえって、辛抱強く待ち、忍んでくださいました。あわれんで、ご自分でわたしたちの罪を負ってくださいました。ご自分の御子を、わたしたちのためのあがないの代価として、ご自分で与えてくださったのです。聖なる方を不法な者たちのために、悪のない方を悪い者たちのために、義なる方を不義な者たちのために与えられました。朽ちない方を朽ちる者たちのために、不死の方を死ぬべき者たちのために与えられたのです。9:3実際、あの方の義のほかに、何がわたしたちの罪をおおうことができたでしょうか。9:4不法で不信心なわたしたちが、神の御子お一人のほかに、だれにあって義とされることができたでしょうか。9:5ああ、甘美な取り替えよ。ああ、測り知れないみわざよ。ああ、期待もしなかった恵みのわざよ。それは、多くの人の不法が、一人の義なる方のうちに隠され、一人の方の義が、多くの不法な者たちを義とするためです。9:6こうして、神は、以前の時には、いのちを得ることにかけて、わたしたちの本性に力がないことを試して明らかにされました。そして今は、力のないものさえ救うことのできる方として、救い主を示されました。この両方によって、わたしたちがご自分の慈しみを信じるように望まれたのです。ご自身を、養い手、父、教師、助言者、医者、知性、光、誉れ、栄光、強さ、いのちと仰ぐように望まれました。そして、着る物や食べ物のことで思いわずらわないように望まれたのです。

10:1あなたも、この信仰を慕い求められ、まず父を深く知ることを得られるなら[1]。10:2実際、神は人々を愛されました。神は、人々のために世を造り、地にあるすべてのものを人々に従わせられました。人々に理性を与え、知性を与え、人々にだけ、上を仰いでご自分を見ることを許されました。ご自分のかたちにかたどって人々を形づくり、人々のもとに、ご自分のひとり子である御子を遣わされました。人々に天にある御国を約束し、ご自分を愛した人々に、それを与えてくださいます。10:3そして、神を知られたなら、あなたは、どれほどの喜びに満たされると思われるでしょうか。また、先に、これほどまでにあなたを愛してくださった方を、どれほど愛されることでしょうか。10:4そして、この方を愛するようになられたなら、あなたはこの方の慈しみに倣う者となられるでしょう。また、人が神に倣う者となれることに、驚かないでください。神が望まれるとき、人はそうなれるのです。10:5実際、隣人をしいたげることも、弱い者たちより多くを持とうとすることも、幸福ではありません。富んで、自分より貧しい者たちに無理強いすることも、幸福ではありません。また、こうしたことで神に倣うことは、だれにもできません。むしろ、これらは、あの方の偉大さとは無縁のものです。10:6そうではなく、神に倣う者とは、隣人の重荷を負う人です。自分がまさっているところで、劣っているほかの人に恵みを施そうとする人です。神から受けて持っているものを乏しい人々に分け与え、受ける人々にとって神となる人

です。そういう人こそ、神に倣う者です。10:7 そのとき、あなたは、地上にいながら、神が天で治めておられることをご覧になるでしょう。そのとき、神の奥義を語り始められるでしょう。そのとき、神を否もうとしないために罰せられている人々を、愛し、驚嘆されるでしょう。そのとき、世の欺きと惑わしとを、とがめられるでしょう。天にあるまことのいのちを知り、この地で死と見えるものを軽んじ、ほんとうの死を恐れられるときにです。その死は、永遠の火へと罪に定められる者たちのために取っておかれています。その火は、そこに渡された者たちを、終わりまで罰するのです。10:8 そのとき、あなたは、義のために一時の火を耐え忍ぶ人々に驚嘆し、その人々を幸いな者とおっしゃるでしょう。あの火を知られるときにです[2]。

訳注

1 この文の結びの部分は、写本に欠けているとみられる。

2 写本はここで途切れる。次の十一～十二章は、別の文書とみられる。

11〜12章　使徒たちの弟子、知識の木といのちの木

11:1 わたしは、奇妙なことを語っているのではなく、筋の通らない探り方をしているのでもありません。そうではなく、使徒たちの弟子となったわたしは、異邦人の教師となっているのです。伝えられた教えをもって、真理の弟子となる人々に、ふさわしく仕えています。11:2 実際、正しく教えられて、ことばの友となった人がいるとします。その人が、ことばによって弟子たちに明らかに示されたことを、はっきりと学ぼうと求めないことがあるでしょうか。ことばは現れて、それを弟子たちに明らかになさいました。大胆にお語りになり、信じない者たちにはわからなくても、弟子たちには説き明かしをなさったのです。弟子たちは、ことばによって、信じる者と認められ、父の奥義を知りました。11:3 それゆえ、父はことばを遣わされました。ことばが世に現れるためです。ことばは、民には侮られましたが、使徒たちによって宣べ伝えられ、異邦人に信じられました。11:4 この方は、初めからおられる方です。新しい方として現れながら、古くからの方であると見いだされ、いつも若々しく、聖徒たちの心のうちにお生まれになる方です。11:5 この方は、とこしえにおられる方、きょう、子と認められた方です。この方によって、教会は富み、恵みは広げられて、聖徒たちのうちに増し加わります。その恵みは、知性を与え、奥義を明らかにし、季節を告げ知らせ、信じる者たちを喜び、求める者たちに与えられます。その人々は、信仰の誓いを破らず、父祖たちの境を越えない人々です。11:6 それから、律法への恐れが歌われ、預言者たちの恵みが知られます。福音書の信仰が据えられ、使徒たちの伝えた教えが守られ、教会の恵みが躍ります。11:7 この恵みを悲しませなければ、あなたは、ことばが、お望みになる人々によって、お望みのときにお語りになることを知るでしょう。11:8 実際、わたしたちは、命じておられることばのみこころに動かされて、骨折って語り出しました。そのことはみな、わたしたちに啓示されたことへの愛から、あなたがたと分かち合っているのです。

12:1 これらのことを読んで熱心に聞けば、あなたがたは、神がご自分を正しく愛する人々に与えてくださるものの多さを知るでしょう。その人々は、喜びの園となり、あらゆる実を結ぶ、よく茂った木を自分のうちに生え出させ、さまざまな実で飾られています。12:2 実際、この場所には、知識の木といのちの木とが植えられています。けれども、滅ぼすのは知識の木ではありません。滅ぼすのは不従順です。12:3 書かれていることも、あいまいなものではないのです。書いてあるとおり、神は初めから、園の中央に知識の木といのちの木とを植えて、知識によっていのちを示されました。初めの人たちは、この知識を清く用いなかったので、蛇の惑わしによって裸にされてしまいました。12:4 知識なしにいのちはなく、まことのいのちなしに確かな知識もないからです。そのため、二つの木は互いに近くに植えられているのです。12:5 使徒はこの意味を見抜き、いのちに至る命令の真理なしに修められる知識をとがめて、こう言っています。『知識は人を誇らせ、愛は人の徳を高める』（第一コリント八・一）。12:6 実際、いのちによってあかしされる、まことの知識なしに、何かを知っていると思う人は、知ってはいないのです。その人は、いのちを愛さなかったので、蛇に惑わされます。しかし、恐れをもって知り、いのちを求める人は、実を待ち望みながら、望みをもって植えるのです。12:7 あなたの心を知識とし、あなたのいのちを、あなたが受け入れるまことのことばとしなさい。12:8 そのことばの木を持ち、その実を取るなら、あなたは、神のもとで慕われているものを、いつも刈り入れるでしょう。それらには、蛇も触れず、惑わしも近寄りません。エバは汚されず、かえって、おとめが信頼されます。12:9 そして、救いが示され、使徒たちは悟りを与えられ、主の過越が進み出ます。季節[1]が集められ、世と調和します。ことばは聖徒たちを教えてお喜びになり、そのことばによって、父は栄光をお受けになります。この方に、栄光が世々限りなくありますように。アーメン。

訳注

1 写本は『季節』ではなく『ろうそく』と読む。

ディオグネトスへの手紙

2026年11月23日版
著者　著者不明
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/diognetus/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/diognetus
全文を、ギリシア語原文（Προς Διογνητον）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC BY-SA 4.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。